



→スカイツリーのアンテナ部分がシャープペンシルの芯のように伸びている。この調子なら、634mでも635mでも、かんたんに伸ばすことができそうだ。後出しジャンケンにだって負けないかも…。



↑10年ほどまえは土採り場で、砂塵と爆音をたてて走りまわるモトクロスライダーたちを追い出すのに苦労をしていたが、葦や薄が、いともかんたんに彼らを追い出してしまった。

三連休の最後、「わるいな」とばかりに晴れた。

「この二日間で空の雲がみんな落ちたのかねえ」

青い空を見上げながらいった舟頭さんの顔は、晴れやかではなかった。

それもそのはず。二日間、収入ゼロだったわけだから、とても笑ってなんかいられない。もんもんと家でテレビを見ながら過ごしたのか、

「さいきん、どのチャンネルをまわしたってお笑いタレントばかり。なんであんなのが、おもしろいのかねえ」
吐き捨てるようにいった。

「なんでだろう」

私も同感だ。

もともと私は笑いが得意ではない。たとえば、テレビ画面を見ていて、みんながいつせいに笑っていても、正確には笑い声がしているとき、おなじタイミングで笑えない。

ときどき、私はみんなとはちがった人間なのではないだろうか、とおもうときがある。

そのせいではないが、私はこれまで

今週のクマ

→ 寒いさむいという人をしりぬきに、クマはすこぶる快調。人の心、クマ知らず。などという、憎まれ口をききたくなくなってしまうほど、いい顔をしている。



→ 渡し舟の乗り場の杭に根を下ろした草は、いまは枯れているが、死んではない。じっと春を待っている。

いちども寄席に行ったことがない。

もし、みんなが笑っているところで、ひとりだけ笑わなかったら、さぞ落語家は傷つくだろうな、とおもうと行けないのだ。それは漫才だっておなじだ。

そんな話を友人にしたたら、

「それは寄席に行ったほうがいいよ」と、いった。

若手の落語家や漫才師には、私のようなへそ曲がりや相手にしたほうが勉強になるのだそうだ。なんとかあいつを笑わせてやろうと、あの手この手を考えるからだという。

そんなものだろうか。それでも笑わなかったらどうなるのだろうか。

「だいじょうぶだよ。楽屋に帰ってから次の出番の芸人に、やりにくい客がひとりいるよ、というだろ。すると、次の芸人が笑わせようとする」

最終的にその日の芸人が笑わせようと頑張るから、お客さんにとってはそのほうがいいのだ、というのが友人の言だ。

そうはいうが、みんなが笑うところで笑えないというのは、けっこう辛いことなのだ。人の気も知らないで友人も冷たい。私は変わった人間なのだろうか。